



昨日はモーツァルトの誕生日とのこと。友人の高橋夫妻がオープニングをその日に合わせて「モーツァルト記念がん哲学カフェ in MSA 横浜」をご自宅で立ち上げられ、それに招かれて、出かけてきました。高橋氏は高校の倫理社会で、死生学を教えておられたので、退職後、十数年間、「死への準備教育」を目的として、東京で「第三の学校」を開校され、活動してこられました。上智大学で死生学を研究されていたアルフォンス・デーケン教授と共に、毎年、講演会、学習会を開いてこられました。私も時々講演を聞きに行っていたものでした。第三の学校は閉校されましたが、高橋氏は、第四の学校(?)のカフェを開くことにされたのです。彼はモーツァルトの愛好家で、ご自宅の一室を防音室にし、音響効果のあるオーディオ・ホールにされ、モーツァルトのすべて楽曲のレコードを所蔵されていることで有名です。そのホールを「がん哲学カフェ」として提供し、モーツァルトもお聞かせしようということでした。

ここ10年ほど、順天堂大学腫瘍内科の樋野興夫教授が「信徒の友」誌で「がん哲学外来 メディカルカフェ」を連載され、がん患者の生きる目的を対話によって取り戻そうと訴えられ、多くの関心が寄せられています。高橋氏の教え子であった、東海大学の腫瘍内科の安藤潔教授が、高橋氏のご希望に応えて、この日のオープニングで「がん哲学のお話」と題して講演をしてくださいました。コンパクトにまとまった分かりやすいお話でした。

日本人の死因を統計からみると、感染症から心臓病、脳血管障害、そしてがんへと移行してきている。かつてがんは死病と恐れられ、隠していたが、治療薬が開発され、罹患しても生存率が高くなり、今は告知し、治療法を伝えるのが当然になっている。医療保険制度により日本人は長寿となっている。しかし、社会は急激に核家族化し、地域社会の繋がりが失われ、生きることを支えるネットワークが家族だけになってきて、孤独で、孤立している。OECD 加盟国の統計によれば、日本人の社会的孤立度はトップ、困っている人に手を差し伸べる度合いは最低となっている。これでは長寿も不安となる。

がん患者の苦しみ(1)身体的苦痛は薬で対処、(2)精神的不安は精神科で診療、(3)社会的、経済的苦痛は国の援助などの制度により対処できるようになり、非常に軽減されてきた。ただ、(4)死の恐怖、生きがいの喪失などスピリチュアルな不安へのケアが不十分である。その苦しみ(4)を分かちあうのが「がん哲学カフェ」である…という内容でした。

患者、家族、遺族、医師などががんに関係するすべての人が自由に語り合うことによって、自分の心の糧を汲み取る場所が「カフェ」です。高橋夫妻はそのための場を提供されました。モーツァルトの



おまけもありました。あいにくオーディオ装置が故障して、かわりに、夫人の教え子である神奈川フィルハーモニー管弦楽団員の森園ゆり氏(violin)、迫本章子氏(cello)により、<モーツァルト バイオリンとビオラのための二重奏 KV423>がバイオリンとチェロで演奏されました。とても自由な曲想で、楽しく、華やかでした。軽快さの中にロマンチックな揺らぎや、ため息が感じられました。音楽は快い緊張と心の和みがあり、素敵です。

「カフェ」本番では、テーブルを囲んで、お茶とお菓子を頂きながら、10名前後のグループに分かれて「対話」の時間をもちました。簡単な自己紹介の後に、私のグループでは、医師の安藤氏が皆様の質問に答えて下さいました。がんの体験、どのように受け止めたか、介護する者の不安、主治医とのコミュニケーション不足、など、話題はあちこちと飛びましたが、自由に話し、良く聞きました。現在では、患者自身が医療を選び、参加する形を取れるようになっています。それにつけても夫が受診した駒込病院では、素晴らしい、安心できる医療を受けられたと感謝せずにはられません。